

第5節 ベンショ塚古墳出土玉類の評価

ベンショ塚古墳では3基の埋葬施設が構築されており、それぞれの埋葬施設に伴うものと考えられる玉類が検出されている。本稿では、出土した玉類に対して、分類的な所見を示した上で、古墳の築造時期との関係を中心に若干の考察を行う。なお、以下で古墳時代の時期区分に言及する場合は大賀（2013a）に基づく⁽¹⁾。

第1項 出土玉類の分類的評価

第1埋葬施設周辺の攢乱土から出土し、第1埋葬施設に帰属する可能性が高いと考えられている玉類として、緑色凝灰岩製管玉8点とガラス小玉3点が存在する。

緑色凝灰岩製管玉は破片がほとんどで、本来の点数は明確ではない。石材的な特徴や推定される直径から、図21の31と32および図化されていない小片3点、図21の33と34はそれぞれ同一個体である可能性が否定できない。そのため、本来の点数は3点以上となる。また、直径と残存状況から推定される全長の関係から、すべて畿内系（大賀2013b）と考えている細長形の管玉である。また、図21-30は見掛け上、完存しているが、片面穿孔様を呈しており、製作時における破損への対応、もしくは使用時における破損面の再研磨が施されている可能性がある。

一方、ガラス小玉はすべて引き伸ばし法によって製作されたもので、紺色透明を呈する通有のものである。材質調査の結果、コバルトで着色された植物灰タイプのソーダガラス（Group SIIIB）であることが確認されている。小口部分は明確に研磨されており、日本列島へ流入してから一定の時間経過が見込まれる。

第2埋葬施設からはガラス小玉が約234点出土している。劣化のため、碎片化している個体を含む。碎片化している個体を除いて、網羅的に材質調査が行われている。

大部分は淡青色を呈し、引き伸ばし法で製作された小玉である。材質は高アルミナタイプのソーダガラス（Group SIIIB）で、銅で着色された通有のものである。仔細に観察すると、色調の相違から大きく3つのグループに細分することが可能である。第一は、透明感の乏しい淡青色を呈するもので、小口部分が明確に研磨されている個体がほとんどである。第二は、やや緑味を帯びて透明感が強いグループである。第三は、第二のグループと類似するが、やや濃い青色を呈するものである。第二および第三のグループに関しては小口部分が研磨されておらず、日本列島への流入からの時間経過が相対的に短かったことが想定される。

三つのグループは基礎ガラスの材質および着色剤に関して相違が認められる。第一のグループはAl₂O₃の含有量が多く、CaOの含有量が少ない傾向が認められ、着色剤に付随したと考えられる少量のPbOが検出される特徴を持つ。第二および第三のグループは材質的特徴も類似するが、第三のグループにおいては少量のMnOが検出され、発色に寄与しているものと考えられる。ただし、MnOの含有量が少ないと目的的に添加されたものとは断定できないかもしれない。また、同程度のMnOが検出されても、必ずしも濃い色調に発色していない個体も含まれる。一方、第二のグループの半数強を占める特にCaOおよびAl₂O₃の含有量が少ないと群は、材質的な凝集性が非常に高く、製作時からのセット関係を維持している可能性が認められる。

他では、引き伸ばし法で製作された高アルミナタイプのカリガラス（Group PII）が5点（No.82・97・101・129・144）、加熱貫入法で製作されたプロト高アルミナタイプのソーダガラス（Group SVC）が1点（No.39）、管切断法で製作された含バリウムタイプの鉛ガラス（Group LI）が1点（No.85）含まれている。これらの7点は他より流通時期が古い種類で、伝世品が混在したものである。

第3埋葬施設からはガラス小玉11点と滑石製の勾玉23点、白玉101点、有孔円板7点、紡錘車形模造品9点が出土している。滑石製玉類には変質によって軟質化して、土製のような外觀を呈するものを多く含む。ただし、これらの変質の様相は埋蔵中における通有の風化とは異なっており、被熱による変質であると考えている。ちなみに、ガラス小玉に関しては被熱の影響は全く観察されず、埋蔵位置が異なっていたことが推測される。

ガラス小玉11点はすべて引き伸ばし法で製作された淡青色を呈するものである。材質調査によって、銅着色で高アルミナタイプのソーダガラス（Group SIIIB）であることが確認されている。さらに、第2埋葬施設から出土したガラス小玉で確認されたものと同じ特徴によって3つのグループに細分される。第一のグループに4点、第二のグループに5点、第三のグループに2点が帰属する。

滑石製玉類に関する説明は基本的に本文へ委ね、製作時期等の限定に有効な勾玉と有孔円板についてのみ取り上げる。滑石製勾玉23点は全長が2cm前後の通有品22点（図42-1～22）と1cm前後の1点（図42-23）に細分される。法量が通有の22点は比較的に厚みがあり、しばしば「石製模造品」であると評価されるよ

うな板状の滑石製勾玉には該当しない。しかし、両側面が平行に研磨され、扁平な印象を与える形状を呈する。板状の滑石製勾玉と時期的に近接することが窺われる。小型の滑石製勾玉1点は小さいながら、比較的丸味が強い形状を呈する。類似する滑石製勾玉は前期末(前VII期)～中期前半(中I期～中II期)の古墳においてしばしば多量副葬されるものである。

有孔円板7点はすべて双孔で、外形がほぼ円形を呈する。二つの孔の孔間距離もさほど大きくはない。すなわち、有孔円板として比較的、古相を呈するものである。

第2項 出土玉類の組成からみた埋葬時期

共伴遺物が豊富で、時期的な位置付けが容易な第2埋葬施設から検討する。第2埋葬施設では小札鉢留眉庇付胄と三角板革綴短甲が共伴しており、典型的な鉢留技法導入期の様相である。さらに、出土した鉄鏃の中に古相の長頸鏃を含んでいることから、中期後半の古相(中III期)の副葬品組成であると考えられる。

一方、第2埋葬施設から出土した玉類はガラス小玉のみである。ほとんどは銅で着色されて淡青色を呈する高アルミナタイプのソーダガラス(Group SIIB)である。約1/3を占める透明感が乏しい色調のものは古墳時代前期後半(前V期～前VII期)に相当する様相6(大賀2020)から存在するが、中期前半(中I期～中II期)には小口部分を顕著に研磨されて、臼状を呈するものが

一般的となることから、様相7の指標要素の一つであると考えている。第2埋葬施設例は様相7に通有の特徴を持つ。また、共伴している色調がやや異なり、小口部分の研磨が認められない新出のGroup SIIBも中I期の大坂府風吹山古墳や中II期の滋賀県新開1号墳北棺等で出現しており、様相7の構成要素であると考えて問題ない。一方、数点ずつ混在するGroup SVCは様相6、Group PIIは様相5、Group LIは様相4に特有の要素であることから、伝世品と位置付けられる。

すなわち、第2埋葬施設から出土した玉類の組成は埋葬時期における最新相ではないが、ほぼ整合的なものと理解できる。後続する様相8の指標要素は、錫酸鉛を着色剤として使用した黄色もしくは黄緑色を呈する高アルミナタイプのソーダガラス(Group SIIB)である。ただし、様相7の構成要素に比べて流通総量が圧倒的に少ないために、完全に置換することはない。中III期に位置付けられる大阪府珠金塚古墳南櫛および北櫛や福井県天神山7号墳第1主体が典型的な事例である。一方で、大阪府御獅子塚古墳第1主体や熊本県長目塚古墳前方部石室のように、中III期に降るにも関わらず、出土したガラス小玉の組成が様相7に該当する事例も少なくない。以上の検討から、ベンショ塚古墳第2埋葬施設の玉類は中III期に位置付けて問題ないと判断される。

次に、第3埋葬施設の検討に移る。第3埋葬施設は玉類以外の副葬品に乏しく、また、遺構の構築順序として



図58 奴山正園古墳出土の有孔円板

も他の埋葬施設との時期的関係は明確ではない。ただし、ベンショ塚古墳の築造の契機となったと考えられる第1埋葬施設とは直交方向に構築されており、平行して構築されている第2埋葬施設よりも後続する可能性が高いと考えている。

出土したガラス小玉は第2埋葬施設と同じ種類であり、時期的位置付けも同様であると考えることができる。また、滑石製の勾玉は前VII期～中II期に特徴的に出現する多量副葬に通有の小型品である。ただし、その大部分はやや板状を呈する滑石製勾玉への接近を窺わせるものである。板状を呈する滑石製勾玉は、前出の御獅子塚古墳第1主体のほか、大阪府西小山古墳や群馬県赤堀茶臼山古墳など中III期に出現することから（大賀2013b）、ベンショ塚古墳第3埋葬施設の滑石製勾玉は中期前半でも中III期に近い時期を想定することができる。

有孔円板も古相を呈するもので、同様に位置付けることが可能である。出現期の有孔円板としては新開1号墳北棺や三重県わき塚1号墳など中II期に比定できる事例が挙げられ、奈良県新沢48号墳北棺なども加えることができる。中III期の福岡県奴山正園古墳例も同様な特徴を持つ（図58）。わき塚1号墳例や新沢48号墳例が特に古相を呈し、奴山正園古墳例は直径に対する孔間距離の比率がやや大きく、外周はやや不整な円形を呈する。ベンショ塚古墳第3埋葬施設例は、奴山正園古墳例や新開1号墳例と類似する。すなわち、第3埋葬施設が第2埋葬施設に後出するとしても、明確な段階差を認める必要はないと考えられる。

一方、第1埋葬施設に帰属すると考えられている副葬品には三角板革綴短甲、長頸鎌、曲刃鎌が含まれており、構築の順序が第2埋葬施設や第3埋葬施設に先行するとしても、中II期まで遡るとは考えられない。すなわち、時期区分論上は第2埋葬施設と同じ中III期に位置付けられる。

この点を前提に考えると、緑色凝灰岩製管玉は前VII期～中II期に特徴的に出現する細長形の規格を持つことから、不整合は存在しない。中III期に比定される前出の珠金塚古墳南櫛および北櫛や天神山7号墳第1主体でも、まだ同種の細長形管玉がセットで共伴している。

しかし、ガラス小玉3点に関しては問題がある。この3点はコバルトで着色された植物灰タイプのソーダガラス（Group SIIIB）であるが、この種類は様相8の指標要素であり、日本列島では中IV期（≒TK208式期）に大量に流入する。しかも、ベンショ塚古墳出土例に関しては小口部分が明確に研磨されており、流入から一

定の時間経過が見込まれる。中IV期に位置付けられるGroup SIIIBは列島全域に多くの事例を挙げることができるのが、宮崎県下北方5号地下式横穴墓や大阪府藤の森古墳など、いずれも小口部分は加熱整形されたままの曲面を残している。後I期前半のTK23型式期に特定できる事例を抽出することは容易ではないが、代表的な事例の一つである大阪府高井田山古墳例でも明確な研磨は認められない。すなわち、Group SIIIBの小口部分の研磨が一般的に認められるようになるのは、定型化した太形で片面穿孔の碧玉製管玉が普及する後I期後半のTK47型式期に降る。和歌山県大谷古墳など多くの事例を挙げることができる。

以上の検討から、緑色凝灰岩製管玉は第1埋葬施設から出土したと考えて問題ないと判断されるが、ガラス小玉に関してはその可能性を認め難い。加えて、第1埋葬施設と明確な時期差が認め難い第2埋葬施設や第3埋葬施設に伴う副葬品であると考えることも困難である。第2埋葬施設や第3埋葬施設と大きな時間差を持った未知の埋葬施設が存在するならば、当該のガラス小玉の帰属を想定することが可能であるが、そのような想定を支持する証拠は見出せない。結局、現状では当該のガラス小玉の由来に関して合理的な説明を与えることはできないのである。

第3項 出土玉類の組成からみた被葬者の関係

ベンショ塚古墳では、3基の埋葬施設においてそれぞれ玉類が副葬されていた。いずれの埋葬施設も盗掘による攪乱等によって、副葬された玉類の全容は不明であるが、第1埋葬施設においては緑色凝灰岩製管玉、第2埋葬施設においてはガラス小玉、第3埋葬施設においてはガラス小玉と各種の滑石製玉類である。

そもそも古墳の副葬品が被葬者の所有物であるかという根本的な懷疑も重要な留意点ではあるが、使用痕を残した個体をしばしば含み、かつ、被葬者の近傍にあたかも着装されたように副葬されることが一般的な玉類に関しては、通常の場合においては被葬者の所有物であることを前提に評価することが可能であると思われる。そこで、同一古墳内の異なる埋葬施設から出土した玉類の組成の異同に関して、考古学的な含意を少し探ってみたい。ベンショ塚古墳の3基の埋葬施設から出土した玉類の組成からは、四つの特質を抽出することが可能である。

第一は、いずれの埋葬施設から出土した玉類の組成も、埋葬時期に近い時期に形成されたセット関係を有しているということである。具体的には前項で詳述した通りで

ある。

第二は、各埋葬施設から出土した玉類は組成がそれ各自である。また、第1埋葬施設に伴う玉類の組成は全容が確認できていない可能性が高い点や、第3埋葬施設に伴う滑石製玉類は棺上から出土した可能性が指摘されており、装身具として同列に扱うことができない可能性が認められる点などの不確実性が残るが、それぞれの埋葬施設にまとまった量の玉類が副葬されていたと想定され、それらは別個に入手されたものであると言える。同一墳丘内に埋葬された複数の被葬者は同世代の血縁関係者であると考えられており（田中1995）、それぞれは基本的に独自の活動によって財を獲得していたことになる。

第三に、玉類の組成の相違に優劣を認めることができない点が指摘できる。このような傾向は多くの古墳において一般的なものであり、時期的に近接する前出の天神山7号墳、新開1号墳、珠金塚古墳における異なる埋葬施設間の関係としても確認される。しかし、古墳の築造においては、築造の契機となり最初に構築される埋葬施設の優位性がほぼ例外なく徹底される点を考慮すれば、副葬された財の構成に優劣が認められないことや、逆転することがしばしば生じることは注目すべきである。

第四は、第3埋葬施設から出土したガラス小玉が、第2埋葬施設に伴うガラス小玉から少量を抜き出したかのような組成となっている点である。このような事象は、同種の玉類がまとまった点数でセットを構成しているなら、他のセットと区別できるような、内的な類似性を具備していなければ認識できないため、あまり注意はされてこなかった。ベンショ塚古墳例は、中期中頃の古墳では一般的ではないやや透明感が高い新出のGroup SIIBを含む一方で、流通量がより多いはずのコバルト着色のガラスを含まないといった少数派の組成であったために、認識できた次第である。同一の墳丘内に埋葬された複数の被葬者が同世代の血縁関係者であるならば、このような財の移動は充分に予期される。管見でも、時期が大きく異なる墳墓の事例には、同様な履歴が窺われるものがいくつか存在する。他の事例における出現的一般性や出現傾向は、被葬者間の関係性を考える上で重要な検討課題であると言えよう。

個別資料の検討のみから結論を得ることはできないが、今後の重要な検討課題として提起しておく。

結語

以上、雑駁ではあるが、ベンショ塚古墳から出土した

玉類を取り上げて分類的な位置付けを行った上で、若干の考察を試みた。すなわち、時期的には3つの埋葬施設間に大きな相違を見込む必要はなく、いずれも中III期に比定して問題ないものと結論した。一方で、第1埋葬施設に由来する可能性が高いと考えられている攪乱土から検出されたガラス小玉に関しては、整合的な位置付けが困難である点を指摘した。また、各埋葬施設から出土した玉類の組成の異同は、それぞれの被葬者の活動や関係性を検討する重要な手掛かりであると考えているが、他の事例を加えた包括的な検討が必要である。改めて検討の機会を持ちたいと思う。

（大賀克彦）

註

(1) 筆者はこれまでベンショ塚古墳を中II期に比定し、出土した玉類の組成に関しても概要に触れたことがある（大賀2002・2010）。これらの認識に関しては、本稿のとおり訂正しておく。

参考文献

- 大賀克彦 2002「凡例 古墳時代の時期区分」『小羽山古墳群』（『清水町埋蔵文化財発掘調査報告書』V）
 大賀克彦 2010「東大寺山古墳出土玉類の考古学的評価 一半島系管玉の出土を中心一」『東大寺山古墳の研究』
 大賀克彦 2013a「前期古墳の築造状況とその画期」『第13回播磨考古学研究集会の記録 前期古墳からみた播磨』
 大賀克彦 2013b「玉類」『副葬品の型式と編年』（『古墳時代の考古学』第4巻）
 大賀克彦 2020「ガラスの材質分類と時期区分」『古川登さん退職記念献呈考古学文集 いにしえの河をのぼる』
 田中良之 1995『古墳時代親族構造の研究』

調査報告書

- 大阪府学務局 1932『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告』第3輯
 大阪府水道部 1965『藤の森・蕃上山二古墳の調査』
 柏原市教育委員会 1996『高井田山古墳』（『柏原市文化財概報』1995-II）
 岸和田市教育委員会 2014『久米田古墳群発掘調査報告2』（『岸和田市埋蔵文化財発掘調査報告書』12）
 京都大学文学部考古学研究室 1959『大谷古墳』
 熊本大学文学部 2014『長目塚古墳の研究』（『2010年度～2013年度科学研究費補助金基盤研究（B）研究成果報告書』）
 滋賀県教育委員会 1961『滋賀県史蹟調査報告』第12冊
 末永雅雄 1991『盾塚 鞍塚 珠金塚古墳』
 帝室博物館 1933『上野国佐波郡赤堀村今井茶臼山古墳』（『帝室博物館学報』第6冊）
 豊中市史編さん委員会 2005『新修 豊中市史』第4巻 考古

- 奈良県立橿原考古学研究所 1981『新沢千塚古墳群』（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第39冊）
 福井市 1990『福井市史』資料編1 考古
 福津市教育委員会 2013『奴山正園古墳』（『福津市文化財調査報告書』第6集）
 宮崎市教育委員会 2020『下北方5号地下式横穴墓』（『宮崎市文化財調査報告書』第128集）
 森浩一・森川桜男・石部正志・田中英夫・堀田啓一 1973『三重県わき塚古墳の調査』『古代学研究』第66号